



Title	巻頭言 : 雜感
Author(s)	阿曾, 洋子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2007, 13(1)
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/56770">https://hdl.handle.net/11094/56770</a>
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 雜 感

### Miscellaneous impression

本学が創設されて13年が経過しました。1期生は卒後10年を迎えており、大阪大学附属病院では副看護師長になった卒業生も2名います。また、今年の大学入試センター試験の受験生は平成元年生まれの人になり、昭和世代から脱却しました。そして、今年度は看護学専攻にとって大きな変化の年になります。本学開設当時から在職されていた小笠原知枝教授、城戸良弘教授が今年度末で定年退職されます。長い期間、本学の看護教育にご尽力いただいたことに敬意を表すとともに、心から感謝申し上げたく思います。さらに、近畿圏内の看護系大学へ昇任されて移られる炭原助教授、中嶋学内講師、西村助手、尾ノ井助手、高橋助手、退職される久米助教授など、諸先生方にもお礼を申上げます。このような状況を鑑みますと、つくづくときの流れを感じてしまいます。そのときの流れの中で、私たち教員が学生に伝えてきたこと、残してきたことを振り返ってみました。吉報もありました。親と子の心を支援できる人材育成教育プログラム(現代GP)が文部科学省で採択されたことです。現在進行中ですが、学部教育の新局面であると思います。

インドでは、200年もの間のイギリス統治から解放されたとき、初代首相であったネール首相は、頭脳蓄積をすることが今後のインドの発展をもたらすと考え、子どもたちの初等教育方針を変えていきました。その教育方針は、既成の枠に捕らわれない柔軟な思考を育て、発想力を豊かにしてゆくことでした。この教育の継続が、現在のインドのIT産業を発達させ、世界でも並々ならぬIT立国として成長し続けています。インド工科大学の教育についてNHKが放映していました。60倍もの難関を経て入学した学生は、全寮制で、教員から出される課題を解くために午前1時まで開放されている図書館に通い、ひたすら学業に打ち込んでいるそうです。課題には、正解はない。思考プロセスが評価されるのです。どのように発想したかが問われるのです。自由な発想力が課題です。この発想力が、Webのソフト開発を自由自在なものとし、アメリカのマイクロソフト社との合弁会社も設立しています。そして、学生はインド工科大学で学んでいることを誇りとして、勉学に励み、巣立っているのです。このような姿を見て、果たして本学の看護学専攻の学生は、本学で学んでいることを誇りに思ってくれているのだろうかと思いを馳せました。また私たちは、どのような学生を育てたいと思っているのかと反問してみました。確かに教育理念は授業概要にも、「21世紀に翔る医療スペシャリスト」のパンフレットにも記載されています。教員の異動が多くなってきた昨今、再び教員間で共通認識を持って教育にあたる必要があると思いました。

インド工科大学での国からの教育資金の豊富さと比較し、大学が法人化され、人員削減や競争的資金の調達などに知恵を絞らねばならない教育環境のなかで、学生にはどれほどの豊かな教育が展開できるのだろうかと、考えさせられてしまいました。教員が精神的に豊かであってこそ、学生にも豊かな教育ができるのではないかと考えると、今こそしっかりと今後の教育の方向性を考えるべきときであると思いました。

本誌についても、少しずつ充実し、大学院教育も進んでいくなかで、本誌の扱いをどのようにするのか、どのような位置づけにするのかを考えるときがきていると思います。数年来、話題にはなっていますが、詰めができていません。来年度に向けて、検討してもよいのでないでしょうか。

今年も、多くの論文が投稿され、査読を経て掲載された本誌の発刊を心待ちにしています。

大阪大学大学院医学系研究科  
保健学専攻 統合保健看護科学分野  
主任 阿曾 洋子